この人に聞く

撮影＝美崎真緒

亡き娘が託したいのちのメッセージを

「普通の家族の普通の暮らし、それがどんなに幸せか。娘が教えてくれました」。六歳で逝った愛娘の「いのち」のメッセージ。限りあるいのちをどう使い、どう生きるのか。問いかけ続ける「いのちをバトンタッチする会」の代表・鈴木中人さんに聞いた。

NPOいのちをバトンタッチする会 代表

鈴木中人さん

すずき　なかと

昭和32年（1957年）愛知県生まれ。56年、㈱デンソー入社。平成4年、長女の小児がん発病を機に、小児がんの支援活動・いのちの授業等に取り組む。17年、会社を早期退職し、「いのちをバトンタッチする会」を設立。21年、人材研修を担うライフクリエイト研究所を設立。いのちの授業やいのちの研修には、6年間で13万人が参加。著書に『6歳のお嫁さん』（実業之日本社）『人生のそのときに心に刻む10のこと』（致知出版社）など多数。いのちに向き合いながら生きる4組の家族のドキュメンタリー映画「四つの空 いのちにありがとう」を制作。誰でも主催や参加できる自主上映映画として、2013年10月より公開。
いのちをバトンタッチする会ホームページ
http://hm7.aitai.ne.jp/~inochi-b/

全国の学校や地域、企業の要請で行う「いのちの授業」「いのちの研修」には延べ15万人が参加。
「幸せは誰かが与えてくれるものではなく、限られたいのちをどう使うかを自分なりに問いかけて、初めて手にできるのです」

限られたいのち どう使いますか

――「いのち」をテーマにした授業や講演、研修に取り組んでおられるそうですね。なぜ「いのち」なのですか。

鈴木　人間はみないつか死を迎えます。その限りあるいのちを何に、どう使っていくのか。それを絶えず自分に問い続けることで、私たちは生き方、働き方を定め、生きがい、やりがいを深めることができます。

東日本大震災の被災地で生命保険の仕事をする方がこう悔やんでいました。「どうして自分はもっと必死に保険を勧めなかったのか。もっと入っていただければ、せめて遺されたご家族の生活再建が進んだのに」と。彼は震災前、自分の仕事は「保険を売ること」だといっていました。それが今は「いのちを守る仕事です」と言うのです。彼は生かされた「いのち」をどう使うのかを問い続けた結果、保険という仕事にこれまでにない使命をみつけたんですね。

かけがえのない「いのち」を見つめることによって、私たちの心は確かなものとなり、その確かな心が、幸せをつくります。生きる喜びを感じられない人が増えた今、「いのち」を見つめて、人生の大切なものに気づいてほしい。その思いで、活動を続けています。

――最近の日本では「いのち」の感じ方にどんな変化がありますか。

鈴木　先日、ある小学校で話をした時、最初に「人は死んだらどうなりますか。生き返る？　生き返らない？」と尋ねました。そうしたら「分からない」に手を挙げる子が何人もいるんですね。〝どうしてだろう〟と思って

いたら、後日、一人の女の子から手紙が届きました。「私は〝分からない〟と答えました。どうしてみんな死んだことがないのに、死んだ後のことが分かるんですか」と。

今の日本では九割の人が病院や施設で亡くなり、そのままセレモニーホールに送られます。死を身近に体験できなくなった子供の「いのち」に対する感性が薄れるのも無理はありません。「人は生き返るかもしれない」と思ったまま、大きくなる子供が増えたら、日本はこの先どうなるでしょうか。

死を考えることは「生きる」を考えることです。もっと生きてほしい、もっと生きたい。そう願っても消えていく「いのち」がある中で、死と向き合わない「いのち」もある。もっと「いのち」をリアルに実感できる場づくりが必要です。

亡き娘のメッセージ

――活動をはじめたきっかけはなんですか。

鈴木　十八年前に、娘の景子を小児がんで亡くしたんです。六歳でした。もっと生きたい、そう願いながら天国に逝った景子が、私に託した「いのち」のメッセージ。景子の生きた証であるメッセージを、多くの人に、そして次の世代にバトンタッチすることに、私の「いのち」を使おう。そう思ったのが、活動のきっかけです。

もちろん、すぐにそう思えたわけではないんです。「なぜ景子がこんなこと」という怒り、死を受容できない苦しみ。「私が殺した」という罪悪感……。そんなどん底から、時間とともに、さまざまな出会いや気づきが積み重なり、私の心の多くを占めていた悲嘆や怒りが少しずつ感謝に変わっていきました。

――景子ちゃんはどんなふうに短い「いのち」と向き合ったのでしょう。

鈴木　景子が闘ったのは、神経芽細胞腫という小児がんの中でも悪性度の高い病でした。三歳の夏ころ、妻の淳子から、私の会社に「景子のおなかに腫瘍がある、すぐ総合病院にいくように言われた」と泣きながら電話が入ったんです。検査の結果、「助かる確率は高くて一五%」といわれ、足が震えました。小児がんの治療には痛い検査がたくさんあります。「針、いやだよ。痛いよぉ」という声を聞くたび、涙が止まりませんでした。検査が終わると「私、頑張ったから」と笑顔をみせます。小さいなりに病気に立ち向かう娘の姿に、私は〝絶対、助ける〟と自分に言い聞かせました。

二年間の抗がん剤治療を繰り返した結果、医師も驚く奇跡的回復をみせ、最後に完全退院の検査をしました。〝やっと普通の生活に戻

6歳で逝った長女の話から小学生にも「死に向き合う」ことを伝える。
「子供の感性はすごい。いのちを身近に感じるきっかけになれば」

れる〟。そう思ったのもつかの間、念のために撮った脳のCTスキャンで転移が見つかったのです。その年の暮れ、骨髄への転移が見つかり、余命は月の単位と宣告されました。もう一言も言葉が出ませんでした。

――あとはもう……。

鈴木　現実を受け入れるしかありません。淳子と話して二つのことを決めました。一つは景子と輝きのある一日を暮らすこと。保育園に行く、公園に行く、おうちでご飯を食べる。年ごろの女の子と同じ「普通」の生活をすることが、景子のいのちが一番輝く時だと思い、そうしました。もう一つは安らかに看取ることです。神経芽細胞腫は最後、全身の骨に転移し腫瘍をつくります。痛みや苦しみがコントロールできなくなった時は安らかに看取ろう、そう夫婦二人で決めました。

景子は「先生やお友達に会いたい」と学校に行くのを楽しみにしていました。その頃は抗がん剤の影響で髪はなく、目の周りがパンダみたいな青あざになっていて、みんなが振り返ります。でも一度も「外へ行きたくない」とは言わず、ベッドの上で宿題をやり、痛い注射を我慢しました。今、出来ることを一生懸命にする、景子の「いのち」は本当に輝いてみえましたね。

――「いのち」と精一杯向き合ったのですね。

鈴木　親の私が言うのもなんですが、最期までよく生き抜いたと思います。病状が進行すると、景子は「痛いよう……、怖いよう……」といって救いを求めるように私を見つめ、涙を流しました。自分の子供が死んでいく姿が見えるのです。最期、景子はうなされ「お願い、もうやめて」と無意識に繰り返しました。痛みや苦しみを言っているのか、私や淳子が「頑張れ」と思うことを言っているのか。ただ、誰より頑張った景子が自分の最期を悟ったのです。「もう頑張らなくていいよ。逝きなさい」。私はそう言いました。二年十一か月闘病して、景子は小さな白い箱になって家に帰ってきました。

映画でリアルな場をつくりたい

――景子ちゃんはどんな「いのち」のメッセージを託したと思われていますか。

鈴木　かけがえのない「いのち」の大切さを実感して生きること。人は誰しも愛され、支えられ、生かされて生きていること、ですね。

景子が発病するまで、私は典型的な企業戦士で、深夜までの残業は当たり前、部下にも厳しくあたっていました。「チームワークが大事」と口では言いながら、「自分が支えられている」という実感なく働いていたように思います。それが変わったのが、ある年の正月。

ドキュメンタリー映画「四つの空 いのちにありがとう」（杉本幸雄監督）を自主制作。10月から自主上映会が始まる。「いのちに向き合い、困難を乗り越えて、幸せになるための物語です。生きよう、きっと幸せになれるからと心で感じてほしい」。映画公式HP「いのちのことづくり」http://www.hm.aitai.ne.jp/~inochinokotodukuri/

▼杉本監督（左端）、出演してくれた家族と

抗がん剤の副作用で造血機能が弱まった景子は常に輸血が必要でしたが、年末年始は血液センターが休みとなるため、自分で集めなければなりません。一人ではどうにもならず、職場にお願いしました。すると三十人くらいが仕事の合間を縫って、病院での事前検査から採血まで献身的に協力してくれたのです。

その中に入社二年目の部下がいて、病院に来てくれた時に「ありがとう」と伝えました。そうしたら彼は「僕はこんなことしかできませんから、いつでも言ってください」と言ってくれたんです。鬼の上司でしたから、部下の前で涙を流すことなんて一度もありませんでした。でもその時ばかりは彼の前で泣きましたね。止まりませんでした。その時点で娘はもう助からないとわかっていましたが、支えられているな、生かされているなとその時、強く実感したのを覚えています。

――そうした「いのち」の物語の映画を自主制作されているのだとか。

鈴木　そうなんです。病や障害という困難を抱えながら「普通の家族」として生きようとする三組の家族と出会い、そこに私の家族のことも加え、四組の「小さないのちの物語」をドキュメンタリー映画にしました。タイトルは「四つの空 いのちにありがとう」（監督：杉本幸雄）です。この十月から上映を始めます。映画館での上映やDVDの販売はせずに、自主上映会を企画してくださる方にDVDを貸し出す形で上映します。今、公開前の事前申込を受け付けています。

――自主上映会にこだわるのはなぜですか？

鈴木　私がこの映画を制作するのは、学校・地域・職場で、親子・家族・仲間と一緒に、「いのち」を感じる、思う、つなぐ場をつくるためなんです。昨年、ある看護学校で講演した際、一歳のころ景子と同時期に入院していたという子に偶然再会しました。びっくりしましたが、今思うと、必然の出会いだったのかもしれないなと思うんですよね。お互いに「いのち」をずっと思いながら生きてきた。あの日、お互いが会えたのは「いのち」を感じ、思う「リアルな場」があったからです。この映画の上映会を通じて、そんな「いのち」を感じるリアルな場を広げていきたいですね。そうして亡き景子が私に託した「いのち」のメッセージを、もっともっとバトンタッチしていきたい。そこに私は残りの「いのち」を使っていくつもりです。（本誌）